Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

皆さんの言及に接して

寺﨑, 昌男

(Citation)
歴史のなかの教師像と教職意識 : 船寄俊雄・近現代日本教員史研究会編著『近現代日本教員史研究』を手がかりに

(Issue Date)
2022-05-15

(Resource Type)
conference object

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009272

皆さんの言及に接して

寺　崎　昌　男

私の著作物が一冊の本の中でこれほど多く言及されたことはありません。いつ人生の幕を閉じてもおかしくない身にとって、皆さんから頂いた言及は、またと得難い栄誉です。

拙著の中でも特に教師像とその歴史的変化の部分が多くの方々に注目されたようです。あらためて想起したのは「教師像」という語の多重さでした。「文学に現れた教師像」のような場合、「像」は作品中に描かれた具象的な教師の姿と言動、思想、感情などを指します。しかし「森有礼の教師像」とか「一連の免許法令が示す教師像は」とかいう場合、その「像」の意味ははるかに抽象的です。にもかかわらず後の二者は似通ったニュアンスを持っています。前者の場合は「森有礼が抱いた理想の教師像は」と言い換えてもよく、後者の場合は「免許関係諸法令の制定者が期待した教師像は」とか「法令群の文言がおのずから示す教師の姿は」といった言い方でも通じます。いやそのように言い換えた方がよくなじむように思われます。あえて言えば、像という語には具象から離れて抽象的になればなるほど、その発出主体の期待や「望ましさ」といった価値的な要素が強まってくるように思われます。文学的に具象化され客観的に描写された教師像と価値的性格を付加された教師像。この二つの間には相当大きな広がりがあります。

『教師像の展開』（近代日本教育論集６）を編んだときに困惑したのは、この広がりをどう受け止めるかということでした。結局選んだのは、同書を「教師論の系譜」という構成にするのを避けることでした。「像」という語の多義性をそのまま抱き込んだ上で、具象性を保ちつつ「人間が教師になる」という事実を大切にすることは出来ないかということでした。忘れられないのは、第Ⅲ章を「教師における人間と制度」としたことです。法制と実践との中間に生きる教師の実像、資格・免許・採用・雇用等のシステムが示す教師像と有名無名の人々の抱く教師像との間の軋轢や緊張、宥和。それらを明治以降の資料の中に確かめることが課題でした。

ところでそのような教師像は、「展開」した上でどこへ行ったのか、また行くべきか。

明治初期の聖職者性を脱却した上で、次に来たのは知識人性か専門職者性か労働者性か、あるいはそれらを総合したものか。著作ではその結論や戦後への見通しを出すには至りませんでした。皆さんから言及していただいたのを機に、改めて考えてみます。自分はどんな教師像を抱いているのか？

（東京大学・桜美林大学・立教大学　名誉教授）